

『マクベス』——人間判断について(1)

山 田 直 道

はじめに

ウィリアム・シェイクスピアの作品『マクベス』の中で、最も人口に膾炙する台詞は何かと尋ねられたら、それは、恐らく主人公マクベスが妻の死を知らされた時に発する、「明日、明日、明日……」の独白であろう。ことにならう。その中で、

Out, out, brief candle!

Life's but a walking shadow, a poor player

That struts and frets his hour upon the stage

And then is heard no more. (V. v. 23—6)

の四行は、或る特定の状況に見合う意味を確かに持ち

ながら、同時に、作者の現実世界に対する一つの態度が看取される台詞だと言えよう。これについては、『お気に召すまま』にも、同じような更に明快なジェイクィーズの台詞がある。

All the world's a stage,

And all the men and women merely players.

(II. vii. 139—140)

即ち、シェイクスピアは、作中人物の口を通して、この現実世界と男女とを、それぞれ舞台と、その上の単なる役者に喩えているのだ。彼が「舞台」及び「役者」という単語を用いる時、それは、単なる名詞ではなく、彼の人生観を支える二つの大きな構成要素であり、更に、

劇作家シェイクスピアを考える場合には、到底無視できない程の含蓄の深い言葉に変わるだろう。私は「劇作家」と言ったが、シェイクスピアは、芝居を書き、創造した舞台上で、様々な登場人物を操作するのであり、その彼が、現実世界は舞台で、現実の人間が登場人物であると主張する時、彼の書く芝居は、この観点とどのよう絡むのであろうか。

このように見るとすれば、彼の作品を人生の縮図と見做すことは可能になろう。即ち、舞台は現実世界であり、役者は現実の人間という具合に、現実世界に逆に適用される定義となり得るだろう。だがここで私が論じたいことは、この定義を、そのまま彼の作品に適用できないかということである。即ち、彼の描く登場人物は、役者と呼ばれる現実の人間であり、彼の創る舞台は、実人生の場であるという風に。言いかえれば、人生は舞台であり、人間は役者であると舞台上の登場人物が言う時、彼らは、舞台上の役者であると意識せずに人生を送っている人間なのであり、ただ観客が一方的に彼らを舞台上の役者として見ているということなのだ。即ち、人間として人生を送りながら、観客には同時に役者として舞台上で「戯

ぐ」姿を見せることになるのだ。つまり、観客にとってのみ人生は舞台であり、人間は登場人物なのであって、舞台上の登場人物にとっては、舞台は人生であり、彼らは人間なのである。従って、冒頭のマクベス及びジェイクィーズの台詞は、実人生を送っている人間が、舞台上の役者に自らを喩えていることになろう。シェイクスピアが芝居を書き、舞台上の状況の文脈の中で、登場人物に現実世界に対する彼自身の見解を述べさせ、しかも、その中で彼にとって本質的な「舞台」、「役者」という言葉を用いている時、私は自分の作品に対する劇作家シェイクスピアの真剣さ、誠実さを感得できるのである。従って、彼の作品のみならず、彼自身を理解するためには、その真剣さを彼の作品から汲み取り、かつ、正しく評価することが必要不可欠であろう。この見解に従って、私は登場人物は役者と呼ばれる人間であり、舞台という現実世界で人生を送っていると考えたいのである。そこで、『マクベス』を例にとり、悲劇における主人公マクベスの、他の人間との人物関係ではない人間関係を考察することにより、シェイクスピアの人間の文脈の側面を明らかにしてみよう。

この小論の目的は、舞台上の登場人物である人間を『マクベス』を材料に用いて考え、その結果が、『マクベス』にどのような意味を与えるかを探ることであるが、人間研究と言っても意味するところは広く曖昧である。そこで、それを人間関係の研究と置きかえてみる事が可能であろう。それでは、その人間関係とは何であろうか。言うまでもなく、複数の人間間の関係ということに一応なろう。例えば二人の人間間に友情とも言うべきものがあれば、それは二人の間柄の内容となり、利害関係、恋愛関係、敵対関係等、皆同様である。では、その人間的感情を存在させるものは何であろうか。それは相手を理解し、判断し、洞察する能力であろう。それでは他人に対する感情とは何であろうか。そこに、人間にはどうにもできない限界というものが無いのだろうか。仮に、甲乙二人の人間関係を考えてみると、互いに感情を抱いて互いを判断し、甲乙ともに自らを特長づける性格というものを備えているのだが、その場合、甲の性格は乙の目にはどのように写るであろうか。結論を言えば、自らの判断力に基づく乙の甲像は、当然のことながら、或る宿命的な限界を背負っていると言えよう。即ち、乙は甲

の外界の人間であり、耳、目、感性、知力など自らの全てを用いて甲の性格を判断するのである。その意味では、乙の判断は、あくまで乙のものとしてとどまり、他の何人のもでもない。同様のことは甲の乙に対する判断についても言えよう。

ところで、『マクベス』を通読してすぐに気付くことは、主要人物が互いに批評し合うという点である。ダuncanのマクベスに対する言葉 (I. iv. 58)、又、マクベスのダンカンに対する批評 (I. vii. 16)、マクベス夫人の夫に対する言葉 (I. v. 17)、そして、マクベスのバンクォーに対する批評 (III. i. 49) など、皆人間批評の好例であり、しかもその批評は相手の性格に対する批評なのである。そしてその批評が成立する人間関係がその根底に存在し、その批評は批評する人間のものとしてとどまるのである。そして更に重要なことは彼らはその批評を彼らの行動の基本に置いていることである。そこで、その行動の結果を前にして、自らの批評に拠って行動することとはどういうことを意味するのだろうかという問題を作品の筋書に従って考察してみたいと思う。

1 劇の骨格

人間関係という視点からこの劇を眺めると、この劇の殺人行為は、人間関係の完全な破壊という意味で重要な行為となるだろう。両者に依存する関係はどちらか一方が消えれば存在しなくなるのは明白であるが、問題は、それがどのようにして消えるかということである。そしてもしもどちらかがこの地球上より消滅するとなればその関係は最終的に存在しなくなるのだ。主人公マクベスに於ては、殺人によって引き起こされるこの完全で最後の破壊は重要な意味を持つてくる。両者の間には何もかも存在しなくなるからだ。ダンカンと暗殺した後、門を叩く音に向けて、*“Wake Duncan with thy knocking! I would thou couldst!”* (II. ii. 73-4) と叫ぶマクベスの心には、既に断たれてしまったダンカンとの人間関係を取り戻そうという見えない欲求が渦巻いていたと言えなくはない。だが事実として殺人の後に人間関係は存在しなくなるのであり、彼の心に忍び寄る絶望感はそれだけ一層真実味を増すことになる。ところで劇中の殺人行為に関する場面は、順に列挙すると、マクベスとバン

クォーの勇猛ぶりが隊長とロスによって語られる戦闘場面、ダンカン殺し、ダンカン付の二人の召使殺し、バンクォー殺し、マクダフ夫人とその息子殺し、シオードの息子殺し、そして戦場におけるマクダフによるマクベスの死ということになるが、最初と最後の場面は有能な軍人マクベスについての叙述であり、その他の戦闘場面は人間関係を持たない敵との必死な戦いであって彼に内的葛藤は生じない。又ダンカンの召使殺しは彼らにダンカン殺しの罪を着せようとした結果であり、二人との人間的感情の交流はシオードの息子殺し同様見出すことはできない。とすればダンカン殺し、バンクォー殺し、マクダフ夫人とその息子殺しはどうであろうか。この三殺人はあらゆる意味でこの劇の骨格だと考えられ、マクベス自身により直接間接行われたばかりか、それぞれの時と場所においてマクベス像を把握させるといふ意味で重要である。彼の性格と心の変化を辿ろうとすれば必然的にこの三殺人の推移を個別的に辿ることになり、従って人間判断に基づく人間関係のテーマを追求するために、これら三つの殺人のうち、まず第一の殺人であるダンカン暗殺を取り上げてマクベス像を浮き彫りにし、人間判断

がどう機能しているかを検討してみたい。

2 ダンカン暗殺

なぜマクベスの心にダンカン殺しの“black and deep desire”が浮び自ら王にならうと思ふに至ったのだらうか。既存の秩序を破壊してまで反逆しようとするマクベスを駆り立てたものは一体何であろうか。この恐ろしい殺人が遂行されるにあたっては人間的要素により醸し出される雰囲気があることは確かだが、魔女の存在によって超現実的要素が生じることも見逃せない事実である。そこでまず第一にマクベスと魔女の関係を考察してみよう。

(1) マクベスと魔女の関係を人間関係と規定できないことは明白である。そしてその関係には他の関係と明確に区別できる相違点がある。即ちマクベスは魔女に対して不利な立場に置かれているということである。冒頭の場面では魔女は次のように談合する。

First Witch. When shall we three meet again?

In thunder, lightning, or in rain?

Second Witch. When the hurlyburly's done,

When the battle's lost and won.

Third Witch. That will be ere the set of sun.

First Witch. Where the place?

Second Witch. Upon the heath.

Third Witch. There to meet with Macbeth.

.....

All. Fair is foul, and foul is fair:

Hover through the fog and filthy air. (I. i. 1—12)

ここで魔女の口を通してマクベスの名前が初めて聞かれることは極めて象徴的であるように思われるが、とりわけ魔女と彼とが不可分であることが示され、彼らは彼が現在何を行い、いつどこで彼に会えるかを知っており、彼らはマクベスを待ち伏せし何かを仕掛けようとするのである。一方バンクォーと連れ立ちフォレスへの帰途についたマクベスは一言ふと漏らす。

Macb. So foul and fair a day I have not seen.

批評家の指摘通り、既に魔女の呪縛が彼に及んでいるのである。出合いの折、マクベスが口を開くまでは一言も言わなかった魔女は、何者であるかとのマクベスの問に次の様に挨拶する。

First Witch. All hail, Macbeth! hail to thee, thane
of Glamis!

Sec. Witch. All hail, Macbeth! hail to thee, thane
of Cawdor!

Third Witch. All hail, Macbeth, that shalt be king
hereafter! (I. iii. 48—50)

この挨拶が彼の間に直接答えたものではないことは明らかで、彼にも“prophetic greeting”のように見えるのである。従ってこれらの言葉は故意に彼にぶつけられたと考えられよう。なぜなら魔女は既に彼を知っており、彼の性格をも知っていたかもしれないからだ。一方マクベスはどうかであろうか。彼は勿論魔女を知らないし彼らがヒースの荒野で待ち伏せしようとは想像すらできない。従って彼は魔女について予断をもつことは不可能でありこの彼らとの最初の出会いが彼らを知る唯一の機会となるのだ。これが、マクベスが彼らに対して不利な立場に置かれていくというこの意味であり、魔女はそれだけ一層悪意をもつ存在であることを示している。我は魔女の言葉を彼らの悪意にまで辿ることはできるがマクベスにはできない。未知の人間からの言葉を判断の

基礎におけばその判断は誤ったものになる恐れが充分あるのである。マクベスとバンクォーはそのような位置に置かれるが、彼らを信用しないバンクォーと異なりマクベスは正体を尋ねたにも拘らず挨拶の言葉を一旦耳にするとその悪意ある存在への疑念は消滅し言葉の内容について問い正そうとするのである。だが魔女はマクベスの追いつがる質問に答えずに消え、代ってダンカンの使者であるロスとアンガスが、コーダーの領主にマクベスが迎えられたという報せをもって登場するのだが、二つの真実が語られたとして魔女の予言は完全にマクベスの心を虜にしてしまう。そしてこの超自然的誘惑が善か悪かと迷いつつも、この瞬間にダンカン暗殺の考えが彼の心に浮上してくるのである。

Macb. My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man that
function

Is smother'd in surmise,……

(I. iv. 139—41)

ウィルソン・ナイトが指摘しているように、これは彼

の悪の芽生えの瞬間と言えようが、同時に、これは予言を彼なりに解釈しようとした最初の試みであろう。將來国王になられるお方」という予言と、現王を暗殺して自ら王座につこうとする考えとが一致してしまっているのである。これは、予言を離れて一人歩きを始めたマクベス像をそのまま示していることになるのだ。

(2) この血腥い汚濁に充ちた劇中で、ダンカン王の性格は純粹そのものである。彼は反逆者マクドナルドを評して、*"No more that thane of Cawdor shall deceive our bosom interest"* (I. ii. 65—6) *"He was a gentleman on whom I built/an absolute trust——"* (I. iv. 13—4) と述べる。R・ウォーカーは、ローダーの最後の肩書が *"most disloyal traitor"* であり、それがそのままマクベスに適用できることを指摘しているが、一方でこのダンカンの言葉は人を信じやすいダンカンの純粹な性格を示しているとも考えることができる。そしてもしもローダーの領主がマクベスであったとしても彼に全幅の信頼を寄せ、*"It is a peerless kinsman"* と評価するのであり、そこに彼の高貴で純粹な性格とマクベスに対する信頼の厚さを読み取ることは極めて容易である。ここで

ダンカンの無垢な性格をマクベスとマクベス夫人の邪悪な性格と対比させることは無意味ではなからう。ダンカンを暗殺した直後マクベスは次のように告白する。

Macb. Had I but died an hour before this chance,
I had lived a blessed time; for, from this
instant,

There's nothing serious in mortality:

All is but toys: renown and grace is dead;

(II. iii. 96—9)

マクベスの口から響く何とも皮肉に充ちた台詞であるが、それだからこそ一層ダンカンの恵み深き性格を強調していると言えなくもない。出来るだけ単純化され純粹化されたこの高貴な性格はマクベスの前に立ち開き、越え難い障害となって彼を悩ますのである。もしも彼が邪悪な王であるならばマクベスは一層早く彼を暗殺しようと決心したことであろう。なぜなら彼は殺人を正当化する理由を求めていたからである。だが作者はダンカンの性格をこれ以上描こうと意図しなかったであろう。なぜならもしもシェイクスピアがマクベスを明確な生きた人間として描こうと考えたならば、彼はダンカンの性格を

複雑に描いて、その結果、マクベスの性格が不明瞭になる愚を犯すことはしないに相違ないからである。

(3) マクベスの夫人に対する愛情と彼女の夫に対する判断について考察してみよう。夫人宛の手紙の中でマクベスはダンカン王来城を報せつつ彼女を自分の出世の協力者“my dearest partner of greatness”と規定するが、その手紙を読んだ夫人は夫の性格を懸念して次のように独白する。

Lady M. Glamis thou art, and Cawdor; and shalt
be

What thou art promis'd. — Yet do I
fear thy nature:

It is too full o'th' milk of human kindness,
To catch the nearest way. Thou wouldst
be great;

.....
And that which rather thou dost fear to
do,
Than wishest should be undone.

(I. v. 15—25)

まず第一に気付くことは“thou”が多く用いられていることであり、かつ又彼女が王殺しを行うには人情が多すぎる夫マクベスの弱い性格を危惧している様子が明らかとなる。暗殺は彼女の心の中で何の抵抗もなしに浮んだ考えであり、夫がその性格ゆえに殺人行為を躊躇することを心配するのである。ここで夫が“dost fear to do”するという先入主を彼女がもっていることは明らかで、マクベスが恐れずに暗殺に向えるようにするにはどうしたらよいかを思案するのである。全てを委せておけないと彼女は考えて、

Lady M. Hie thee hither,

That I may pour my spirits in thine ear,
And chastise with the valour of my tongue
All that impedes thee from the golden
round, (I. v. 25—8)

と心を決めるのである。彼女は「言葉の勇氣」で夫を王冠に近づけようと方針決定を行うが、この「言葉の勇氣」とはどのようなものであり、彼を王冠から遠ざけるものは一体何なのであろうか。

(4) マクベス夫人の性格について

マクベスからの使者がダンカン王の来城予定を告げると彼女は、"Thou'rt mad to say it;" と叫ぶが、R・ウォーカーの指摘通り夫を国王と想像してしまった夫人であるにしても、国王暗殺計画を実行する機会が余りに早く到来したことに驚いたとも言えよう。そして夫が約束されたものになるためにはダンカン王は暗殺されねばならないという決心は増々強固なものとなり、次のように祈る。

Lady M.

Come, you Spirits

That tend on mortal thoughts, unsex me here,

And fill me from the crown to the toe, top-full

Of direst cruelty! Make thick my blood,

Stop up th'access and passage to remorse;

That no compunctious visitings of Nature

Shake my fell purpose,……

(I. v. 40—8)

事前の憐れみも覚えないようにと恐れる女性であることが明確になり、残酷そのものになろうとしてなれない

ために必死に祈るのであり、非道な行為を行うには余りにも女性的であることを明らかにする。その彼女が「言葉の勇氣」を持ち合わせており、これは彼女の性格及び夫に對する彼女の以後の態度を解く鍵の一つとなると言えよう。帰城した夫を迎えた彼女は、一種の法悦状態で、彼のことを、彼女の希望と喜びとを無にする勇氣のない夫であると一方的に印象づけようとする。一方マクベスは極めて冷静にダンカン王の来城と退城を彼女に教えるが、その後、彼女は、"O! never/ Shall sun that morrow see!" (I. v. 60) と叫んでダンカン王暗殺を既定の行動としてゐる姿を明示する。そして彼女の彼に對する言葉には、彼がいつ何時弱い性格を暴露して殺人行為を思い止まるかわからないという危惧が垣間見えるのである。

ここで、この劇全体の文脈から彼女の性格を考察してみよう。彼女は果してマルカムの言う「fiend-like」な女性であろうか。「fell purpose」に限って言えばそれは邪悪であり残酷であるが、大切なことは、これは決して悪のための悪ではないということである。即ち彼女が残酷であるからこの行為に走ったということではなく、夫を

国王にするため、夫の出世のために悪であらねばならぬ
 ということなのだ。従って前述の彼女の独白は良心に
 負けまいとする必死の努力のあらわれであり、ダンカン
 暗殺を恐ろしい行為であると知っているからこそ彼女は、
 残酷であり得ないのだし、その意味で彼女は決して、悪
 魔のような女性ではない。あくまで夫の出世の協力者
 として夫を国王にしようと願うだけで、自ら妃になろう
 と意図してはいない。そして彼女はこの件についての主
 導者になろうとするのだ。敢て二人のダンカンの召使い
 を酒浸しにし、夫が手にもつ血染めの短剣を置いてくる
 のも全て夫のためなのである。この行為中に彼女は罪責
 感を一つももたず、夫のためであるという正当化がそれ
 を覆い隠すのである。彼女が罪悪感を感じない程強靱な
 神経の持主であるということではなく、夫を助けている
 間はそれを意識しないで済むのである。そしてそのお蔭
 で彼が王座に昇ることができ、彼女は協力者としての責
 任を果し終えたのだが、その後の彼女はとりなるであら
 うか。いわゆる夢遊病の場面で、言ってはならぬことを
 口外したマクベス夫人は、過去を眺めながら、口走る。

Lady M. Here's the smell of the blood still: all the

perfumes of Arabia will not sweeten this
 little hand. Oh! oh! oh!

(V. i. 56—8)

このように血で表象される罪の重荷にあえいでいるの
 であり“Yet who would have thought the old man
 to have had so much blood in him?” (V. i. 38—9)
 と述べて、かつて“My hands are of your colour; but
 I shame to wear a heart so white” (II. ii. 63—4).と自
 己欺瞞していた自らの姿を露呈して、結局、夫を王座に
 つけるといふ自らの役割を終えたのちに、殺人という残
 虐行為が残り、彼女はそれと直接対決するということにな
 るのだ。夫に対する自分の意味と夫に自らを没入させ
 ることが暗殺後に消滅し暗殺行為のみが彼女に襲いかか
 ってきたといえるのである。この故に、彼女が夢遊病に
 陥りそれでも尚夫のことを心配するとするなら、彼女は
 決して、悪魔のような女性ではなくむしろこまやかな
 神経の持主といえるのだ。彼女は結局自分自身の性格ゆ
 えに破滅したのであり、その意味で極めて悲劇的である。

(5) マクベスのダンカン観及び躊躇

一幕七場のマクベスの独白で、それまで見えなかった

ためらいが現実化する。暗殺が全てを決するなら未来を賭けることができるが、この場合でも審判はこの世で受けざるを得ない。更にダンカンには二重に自分を信頼しており、自分は暗殺者を妨げても自らが暗殺者になることはできない。そして彼のダンカンの性格についての判断が続く。

Besides, this Duncan

Hath borne his faculties so meek, hath been

So clear in his great office, that his virtue

Will plead like angels, trumpet-tongu'd, against

The deep damnation of his taking-off:

And pity, like a naked new-born babe,

Striding the blast, or heaven's Cherubim, hors'd

Upon the sightless couriers of the air,

Shall blow the horrid deed in every eye,

That tears shall drown the wind

(I. vii. 16—25)

彼のダンカンの性格判断はダンカンの恵み深き性格と一致して誤りはない。そして結論は、

I have no spur

To prick the sides of my intent, but only
Vaulting ambition, which o'erleaps itself

And falls on th' other — (I. vii. 25—8)

となり、彼はダンカンと自分の関係を極めて冷静に深く考え彼はダンカン王が恵み深い高潔な人柄であるが故に暗殺をためらうのである。これはマクベス夫人の云う“too full of the milk of human kindness”そのものであろう。そして彼は夫人に向かって“*We will proceed no further in this business*”と云うのであり、折角名譽を得たのに“*usurper*”の汚名を着たくはないとの考えを示すのである。

このようにそれぞれの性格、人間関係を考察してきたが、既に明らかのように相互を批評しそしてその批評に基づいて行為がなされていくのである。それではそれは一体どのような結果を生じていくであろうか。ダンカン殺しに於ける人間判断の役割を次に考察してみよう。

マクベスの独白後マクベス夫人が登場し二人は対話を持つ、この対話はこの場面に於けるのみならず劇全体に於いても重要な意味をもつものだといえよう。なぜならかつていたマクベスはダンカン暗殺を決行するようになる

るのか、その気のすすまなきがいかにか克服されたかがこの対話の中に見出されるはずである。彼女は次の台詞で躊躇する夫への攻撃を開始する。

Was the hope drunk,

Wherein you dress'd yourself? Hath it slept since?

And wakes it now, to look so green and pale

At what it did so freely (I. vii. 35—8)

そして彼女は今から「彼の愛とはごんごん」ものと考え、と明言する。常識的にはノンセンスであるこの言葉も夫婦間の愛を賭けている彼女の姿を露わにして彼女は続ける。

Art thou afraid

To be the same in thine own act and valour,

As thou art in desire? (I. vii. 39—41)

この台詞は彼の性格への彼女の判断から生まれるセリフである。即ち夫からの手紙を受け取った時、

.....thou wouldst be great;

Art not without ambition,.....

.....

.....rather thou dost fear to do (I. v. 19—25)

と彼女は独白するからである。彼女のセリフは全て彼についての彼女の判断から生じておりそれが彼を攻撃する手段として用いられているのである。又彼が殺人行為を恐れているという考えが彼女の心の中に深く根を下しているのである。従って彼女は彼の男らしさに攻撃的的を絞って次のように述べる。

And live a coward in thine own esteem

Letting "I dare not" wait upon "I would",

(I. vii. 43—4)

「coward」という言葉は望むべき応えを期待してのことであり彼女の高揚した声の調子は彼の制止

Pr'ythee, peace.

I dare do all that may become a man;

Who dares do more, is none. (I. vii. 45—7)

を惹起する程である。この答の背後には、ダンカンを暗殺することは男らしくない行為だから出来ないというマクベスの暗黙の気持が流れておりここで彼は男らしさを強調しているのである。それに対し興奮したマクベス夫人は、

What beast was't then,

That made you break this enterprise to me?

(I. vii. 47—8)

と叫ぶ。この場合いよいよマクベスが夫人に計画を打ち明けたかは不明であるが、それにもまして彼女のいら立ちが彼の不決断と女々しさに向けられ、

Nor time, nor place,

Did then adhere, and yet you would make both:

They have made themselves, and that their fitness now

Does unmake you. (I. vii. 51—4)

と更に彼の臆病への攻撃となっていくのであり、遂に、

I have given suck, and know

How tender 'tis to love the babe that milks me:

I would, while it was smiling in my face,

Have pluck'd my nipple from his boneless gums,

And dash'd the brains out, had I so sworn

As you have done to this. (I. vii. 54—9)

彼の意気地の無さへの最高潮の攻撃となるのである。そしてマクベスの疑問、"if we fail"に對してそれは勇気のネジを絞めることで失敗はないと断言して具体的な

暗殺法を夫に教えるのである。これに對しマクベスは、

Bring forth men-children only!

For thy undaunted mettle should compose

Nothing but males.

(I. vii. 73—5)

と叫び声を挙げ、彼女を大胆不敵な性格を備えた女性と判断するのであり、遂に暗殺決行の決心をする。このように彼女の積極的な態度は夫の消極的なそれと対照をなし、激越な声の調子、疑問文、平叙文、修辭疑問文等の文型を駆使し"thou"と"I"をそれぞれ疑問文と平叙文に使い分けて互いの立場を明確化して、自分は、一旦実行を誓えば必ず行くと述べて、夫の臆病を攻撃し、終始夫の男らしさに訴え続けるのである。では一体何が彼をして決心させたのであろうか、ここで、一幕五場、16—31行の彼女の独白を想起してみよう。夫からの手紙を受け取った後に彼女は彼に、

that which rather thou dost fear to do

Than wishest should be undone?

と述べ彼女はマクベスが殺人行為自体を恐れていると思うのである。そして更に言葉を續けて、

Hie thee hither,

That I may pour my spirits in thine ear;

And chastise with the valour of my tongue

All that impedes thee from the golden round,

と夫の性格を心配し夫は暗殺行為自体を恐れてゐると

信じる彼女は「言葉の力」で彼を王冠から遠ざけるもの

全てを圧倒しようと決心してゐるのだ。そして事實彼女

はこの夫の性格判断に従つて行動するのであり、王冠か

ら彼を妨げるもの即ち彼の心の中の躊躇を「言葉の力」

で打ち負かそうと実行に移すのである。従つて夫の女々

しさ攻撃の鋭い舌鋒、夫婦の愛を賭ける執念、諺の使用

等は皆「言葉の力」から生まれたことなのだ。だがこの

彼女によし言葉の力はあつても実行の手が備わつていな

かつた為に彼女はそれを夫に要求したのであつた。

一方マクベスはどうか、「terrible feat」を決

意したのはどうしてなのであろうか。彼は確かに「va-

louring ambition」の持主であり、それが目的遂行の動機

の一つであるかもしれないが、それも明確ではない。明

らかなことは彼の武人としての誇りがその非難は対して

鋭敏に反応を示したことである。一例をあげると、宴会

の場面で、バンクォーの亡霊に驚いたマクベスは夫人に

たしなめられる。

Lady M.

Are you a man?

Macbeth.

Ay, and a bold one, that dare look on

that

Which might appal the devil.

(III. iv. 58—9)

そして再登場した亡霊に向つて、

What man dare, I dare:

.....

Take any shape but that and my firm nerves

Shall never tremble: or be alive again;

And dare me to the desert with thy sword;

If trembling I inhabit then, protest me

The baby of a girl.

(III. iv. 99—106)

と話しかけ彼はものに動じない大胆な男であると明言

する。彼は「baby of a girl」となることを恐れるので

あり、又彼は「Bellona's bridegroom」、「brave Macbeth」

「Valour's minion」なのである。従つて彼の女々しさを

叱責すれば実り多き効果を生み出すことは誰でも想像で

きることであり、彼女が彼への攻撃の的をそこに絞つた

のも当を得た判断であった。従って彼が最後に決意したセリフ、*"I am settled……"* は自らの武人としての誇りを守ろうとする彼の必死の努力を表明している台詞と考へることは可能であろう。従って彼女は彼が実行行為をためらっていると判断して彼の勇らしさに訴えかけ所期の結果を収めたために彼女の判断力が正しいものように見えるのだが、事實は彼女は実行行為自体を彼が恐れているという誤った判断を下したことになるのだ。彼は人殺しを仕事とする人間として決して行為自体を恐れたわけではないのだから。

最初から最後まで彼によって直接間接行なわれた殺人行為は数多いが行為自体に対する躊躇は一つも見い出せないのである。彼が行為をためらったのはダンカンの高潔な性質故であり、従って、もしも彼が、彼女の攻撃が的はずれであり判断を誤っていると感得できれば彼は暗殺をためらう理由を明示することができたであろう。そして更にもしも彼が彼女の性格を *"undaunted mettle"* と断ずることなく彼女の云う全ては *"the valour of her tongue"* 故であると判れば、その彼女から暗殺実行に当

つての自信を与えられることはなかったであろう。彼女は彼女が弱い自己を隠そうとしていたことに気付かず、彼女の偽りの姿を真の姿と見誤ってしまったのである。

要するにこのダンカン殺しに至る場面に於いては、人間判断が主役を務めていると云っても過言ではない。なぜならマクベス夫人の夫の性格判断が、夫に対する行為自体を恐れていると信じて彼の弱点に攻撃を集中するのである。この思い込みは間違いではあったが、結果としては成功を収め彼女にとっては致命的とはならずに済んだが、マクベスについては誤った判断に基づいて攻撃され、武人としての誇りを守るために彼女の攻撃に屈服し更に彼女を大胆な女性と信じて自信を与えられ行為へと踏み切るのである。従って彼について云えば、この判断の誤りは致命的であり武人としての誇りと並んでダンカン殺しへと踏み切る主人公の人間の文脈での悲劇性を解く鍵の一つとなるであろう。

(一橋大学助教授)